

「ロンドンには花束となって揺れている」 — 。のちに語りぐさとなる書き出しで本紙特派員の記事が載ったのは、1953(昭和 28)年 6 月 3 日の朝刊だった。英国のエリザベス女王の^{たいかんしき}戴冠式は、華やかなトップニュースとして世界を巡った。

父君ジョージ 6 世の急死とともに即位したのは前の年の 2 月だった。63 年余が流れ、今年 9 日に高祖母のビクトリア女王を抜いて、在位が歴代最長になったとニュースが届いた。王室によれば、同日の午後 5 時半ごろ、高祖母の 2 万 3226 日と 16 時間 23 分を超えたという。

かの国らしい律義さに感心する。といっても祝賀の行事は行わず、女王夫妻は当日も鉄道の開通式典に出席して公務をこなした。祝うことは高祖母の死を喜ぶことにつながる、との配慮からと伝え聞く。

そういえば、114 年前のビクトリア女王の葬儀を、ロンドンに留学中の夏目漱石が見ている。大変な人並みの中、下宿のあるじに肩車をしてもらったと日記に残る。「^{ひつぎ}柩は白に赤を^{もっ}以て^{おお}掩われたり」。寒い 2 月の土曜日のことだ。

そのビクトリア女王の享年も、89 歳の現女王はすでに超えている。ダイアナ元皇太子妃の事故死の際には、冷ややかな対応が国民の批判を招いた。寒風も吹いたが、いまや広く敬愛を集め、王室支持の世論は高値安定を保つ。

この間の首相はチャーチルをはじめ 12 人を数えるそうだ。稀代の大輪というべきか。^{なが}永く延ばしていただききたい、在位の歲月だ。

『天声人語 2015年9月13日(日)』